

# 第13回

香川県透析医会・医学会

プログラム・演題抄録

会 長：大林 誠一

会 期：平成6年11月27日(日)

会 場：リーガホテルゼスト高松

## プログラム

### I. 一般演題

- 1 高カロリー輸液施行中に銅欠乏による汎血球減少をきたした血液透析患者の1例……………129  
香川労災病院内科 塩見勝彦 他
- 2 Wegener肉芽腫症による慢性腎不全をきたし、血液透析に導入した1例……………129  
香川医科大学第2内科 高橋則尋 他
- 3 PTAを施行した鎖骨下静脈狭窄症の1例……………130  
坂出回生病院泌尿器科 岡本賢二郎 他
- 4 当院におけるCAPD導入18例の検討……………130  
香川県立中央病院内科 山本修平 他
- 5 当院の透析患者におけるトレッドミル運動負荷試験の検討……………131  
滝宮総合病院内科 瀬戸邦雄 他
- 6 透析を離脱しえたウェゲナー肉芽腫症の看護経験……………131  
キナシ大林病院内科 吉田康代 他
- 7 透析導入期の援助……………132  
海部医院 高砂康子 他
- 8 要介護透析患者の実態調査：大川総合病院の場合……………132  
大川総合病院透析室 稲田真由美 他
- 9 要介護透析患者のQOLについて：外来機能施設における高齢者看護の1例……………133  
こはし内科医院 金丸美佐子 他
- 10 透析患者の脳動脈瘤、頸部クリッピングの看護……………133  
キナシ大林病院外科 阿部和代 他
- 11 透析患者のシャント部清潔に対するアンケート調査……………134  
永生病院透析室 中井美由紀 他

### II. 特別講演

- 透析療法における人間工学的検討……………135  
大野記念病院副院長 田中 寛

## I. 一般演題

1. 高カロリー輸液施行中に銅欠乏による  
汎血球減少をきたした血液透析患者の1例

香川労災病院内科

○塩見勝彦、土橋浩章、見元淳子、井手 宏  
菅 敬彦、壺井圭一、稲田俊雄、石田 誠  
中村之信、影山 浩

症例：66歳、男性。持続腹膜透析中に腹膜炎を起し平成4年3月当院入院となった。血液透析に移行したが出血性胃潰瘍術後より慢性の癒着性イレウスとなり、同年10月より中心静脈栄養を開始した。平成5年7月末より汎血球減少となり同年8月RBC $181 \times 10^4 / \mu\text{l}$ 、Hb5.4g/dl、Ht16.2%、WBC $1200 / \mu\text{l}$ 、Plt $7.9 \times 10^4 / \mu\text{l}$ 、骨髓所見は有核細胞数 $3.9 \times 10^4 / \mu\text{l}$ 、赤芽球系11.5%、顆粒球系58.3%で成熟顆粒球の減少と幼若顆粒球の細胞質内空胞形成を認めた。血清銅、セルロプラスミン低値より銅欠乏と診断し、市販の銅含有の微量元素製剤の投与を開始したところ投与後2週間で網赤血球の増加とともに貧血の改善、好中球、血小板の増加を認めた。

2. Wegener肉芽腫症による慢性腎不全をきたし、  
血液透析に導入した1例

香川医科大学第2内科

○高橋則尋、木原 実、橋本真由子  
藤岡 宏、藤田由美子、内田光一  
小路哲生、隅蔵 透、湯浅繁一

症例は18歳、女性。12歳時に発熱、関節痛認め、近医にて若年性関節リウマチと診断、当院小児科紹介となる。経過中鼻症状も合併し、生検にて Wegener肉芽腫症と診断され、ステロイド剤、免疫抑制剤などにより治療されるも昨年6月頃より徐々に腎機能の悪化を認めたため、今年2月当科紹介となる。当科入院時、BUN127、Cr11.7mg/dlとすでに尿毒症状態であり、透析療法を開始したが、大量の鼻出血を併発しており、抗凝固剤にはフサンを使用した。また、血管内溶血によると思われる血小板減少を認めたが、治療により改善した。なお、C-ANCAは陰性であった。本例のような全身性疾患に伴う腎不全の導入に際しては、全身管理が重要であると思われた。

### 3. PTAを施行した鎖骨下静脈狭窄症の1例

坂出回生病院泌尿器科

○岡本賢二郎、塩津 智之

同 内 科

長尾修自、松浦 達

鎖骨下静脈カテーテル挿入の既往がないにも関わらずシャント側で鎖骨下静脈狭窄症をきたし、Percutaneous Transluminal Angioplasty (PTA)術の施行により症状の改善を認めた症例を経験したので報告する。症例は50才女性。慢性糸球体腎炎のため腎不全となり1990年透析導入となった。なおシャントは1989年左橈骨動脈と橈腕皮静脈にて作製している。1991年より左前腕の浮腫を認めたが透析施行に問題なく日常生活にも支障なかったため経過観察していた。1994年浮腫は左上腕全体におよび、屈伸にも影響がでてきた。血管造影で鎖骨下静脈の高度の狭窄を認めた。当初は血栓による閉塞も疑いウロキナーゼによる溶解療法を施行したが無効だったため併せて PTAを2回施行した。浮腫は上腕において改善が見られ屈伸困難も訴えなくなった。

近年静脈カテーテルの挿入の既往がないにも関わらず鎖骨下静脈閉塞を来す症例が報告されるようになりその原因は、シャント血流の増加による胸郭出口部や静脈弁といった生理的狭窄部の反応性肥厚によるといわれている。本症例も類似したものであろうと思われるので文献的考察を加え報告する。

### 4. 当院におけるCAPD導入18例の検討

香川県立中央病院内科

○山本修平、小比賀二郎、三宅 速

同 外 科

大西真人、多胡 護

当院では、1991年以来おもにpositive selectionでCAPDを導入しており、今回その成績と臨床経過について検討した。対象は、当院でCAPDに導入した18症例(APD2例を含む)で、男性11例、女性7例、導入時平均年齢46歳であり、原疾患は、慢性糸球体腎炎16例、間質性腎炎1例、急性腎不全1例であった。観察期間は1.5から53ヶ月(平均23.5ヶ月)であり、16例は現在もCAPD継続しており(うち1例は12ヶ月で他施設へ転院)、CAPD離脱例は2例でその原因は1例は種々のトラブルによる神経症(13ヶ月HDに移行)、脳梗塞(5.5ヶ月死亡)であった。合併症は、腹膜炎5例、トンネル感染2例のべ3回、出口部感染9例のべ12回、溢水6例、腰痛2例、精神・神経症状5例、ヘルニア2例であった。また、カテーテルの再挿入に至った症例はトンネル部の固定不良、カテーテルへの大網の絡みによる排液不良の2例であった。18例中16例は社会復帰し、短期間の入院を必要とするトラブルがあったものの比較的良好なQOLが得られており、観察期間が短いもののpositive selectionでのCAPD導入は有用な治療法と考えられた。

## 5. 当院の透析患者におけるトレッドミル運動負荷試験の検討

滝宮総合病院内科

○瀬戸邦雄、飛岡 徹、前田嘉信、横手亮二  
大西公二、鷹野 護

血液透析(以後HD)患者にとって虚血性心疾患の合併は決して稀ではなく、HD患者の主要な合併症の一つとなってきた。また近年HD技術の向上による、HD患者の絶対数の増加、高齢化、さらに、糖尿病合併例の増加に伴い、虚血性心疾患合併HD患者を診る機会も増えてきている。今回、我々は、当院における慢性HD患者30例のうち20例に、トレッドミル運動負荷試験を施行し検討したので報告する。男15例、女5例で、年齢は39から77歳で、7例に、胸痛歴を認めた。20例中、8例が陽性であり、うち7例が糖尿病患者であった。8例中、6例に冠動脈造影(以後CAG)を施行した。その結果、4例に有意狭窄(1枝病変3例、2枝病変1例)を認めた。正常冠動脈であった2例は、胸痛歴をもつ糖尿病患者で、微小血管レベルにおける循環不全の可能性もあり、引き続き十分な注意が必要と思われた。

## 6. 透析を離脱しえたウェゲナー肉芽腫症の看護経験

キナシ大林病院内科

○吉田康代、川田るみこ、飛谷美香子  
西尾佳余子、山崎成美、内海市江、多田智子  
山本光子、藤本千香子、六車美佐子  
下河久美子、北脇啓子、稲垣妙子  
塩田久美子、丸岡敬幸、鬼無 信、大林誠一

症例は21歳、男性。約1年前に蛋白尿、血尿を指摘されるも放置。平成6年7月下旬、高熱、鼻閉感、口内炎が出現し近医受診するも、腎機能が急激に悪化してきたため、当院へ転院となる。腎生検より、ウェゲナー肉芽腫症と診断される。当初、体力の消耗が激しく、連日の検査や処置等も含めて、種々の問題点を抱え、やり場のない精神的な苦痛を伴い、「死」をも覚悟している言動があった。そのため、私達は、難治性疾患および特定疾患をどう告げるべきかなど、本人及び家族に対する精神的看護に苦慮した。しかし、幸いにも透析は数回にて離脱でき、その後の経過も良好で、3ヶ月後、笑顔での退院の日を迎えることができた症例を経験したので報告する。

## 7. 透析導入期の援助

海部医院

○高砂康子、岡田圭子、岸本直美、本野扶三代  
吉原史恵、山地英子

慢性腎炎患者は、外来において長期治療期間中に、医師から透析の必要性についての説明を受けてはいるが、自分の事として具体的に受け入れている患者はほとんどいないと思われる。また、外来通院中に医師の説明のみでは患者が十分に透析について理解することは困難である。そこで、私達は患者が現状を認識し正しい理解の基に、スムーズに透析が導入できるように援助する必要がある。

導入期の援助が退院後の患者の生活に大きな影響を与えることはいうまでもない。よりよい社会生活と快適な維持透析をおくれるようにするためにも、形式にとらわれず個々にあった援助方法を考えて実践していくべきだと考える。当院での透析導入患者の援助について述べる。

## 8. 要介護透析患者の実態調査 ：大川総合病院の場合

大川総合病院透析室

○稲田真由美、石井美千代、六車すみえ

当院透析施設は昭和61年4月より血液透析療法を開始した。以後透析導入患者は、毎年増加の傾向にある。平成6年4月現在65才以上の高齢者透析患者は全体の51.1%、さまざまな合併症を有する糖尿病性腎症由来の透析患者が20.9%、介護を要する透析患者が37.2%と増加しつつある。その様な透析患者に、家族の協力、透析施設の援助のみでは対応しきれないのが現状である。今回、私たちは要介護患者の実態と福祉施設の現状、患者、家族の支援方法について検討したので報告する。

## 9. 要介護透析患者のQOLについて： 外来機能施設における高齢者看護の1例

こはし内科医院

○金丸美佐子、成木由貴子、松本正義

近年平均寿命が延び高齢者が増加しつつある中、要介護透析患者の問題は切実である。既に特有の障害を持ち合わせている上に透析治療のため通院を余儀なくされ患者自身とその家族の負担は大きい。当院に於ても65歳以上の患者が25%を占めており、要介護透析患者は全患者の5%である。

この症例はADL障害強く、通院困難であるため、本来は社会的入院の適応となる状態であるにもかかわらず、外来通院している。外来機能施設である当院での通院を継続していくことが身体的、精神的リハビリとなり結果的にはADL、QOLの向上につながると患者と家族が考えているからである。

即ち、要介護患者の透析看護に求められているものは、医学的な問題だけでなく、精神的、心理的な面を考慮した上で、その人らしい家庭生活が送れるよう地域社会、家族の協力を得ながら可能な限り通院が継続できるよう支援していくことであると考えます。

## 10. 透析患者の脳動脈瘤、 頸部クリッピングの看護

キナシ大林病院外科

○阿部和代、藤本なつ子、谷本邦彦

同腎センター

塩田久美子、大林誠一

症例は透析歴10年、61才の女性で、頭痛、頭重感が2～3ヶ月持続していた。MRアンギオグラフィーによって、右中大脳動脈に5mm×5mmのダルマ状の動脈瘤を発見し、破裂の予防的手術を施行した。

脳動脈瘤手術後は血管攣縮予防のために溢水状態にする必要がある。透析患者ではこの状態は心不全を招き危険な状態とされる。

この点に関し、看護面より適正透析を考えたので報告する。

## 11. 透析患者のシャント部清潔に対する アンケート調査

永生病院透析室

○中井美由紀、十川みゆき、安藤まゆみ

真鍋由利、古川美佐子、山崎敦美、小松陽美

高田京子、辻 スナオ、小森久司

同 内 科

山崎康司、森 伊津子

〈目的〉シャント部の感染予防の点から、透析患者のシャント部ケアに対する実態調査を行い日常生活上の指導に役立てる。

〈方法と対象〉透析患者26名（外来17名、入院9名）に対してシャント部の清潔を中心にしたアンケート調査を行うとともに、シャント部の消毒時のガーゼ汚染度と比較検討した。

〈結果〉ガーゼ汚染度ではⅠ群（きれい）7名、Ⅱ群（少し汚れている）8名、Ⅲ群（汚れている）11名であった。Ⅰ群では入院患者の割合が高く、外来患者の多くが、Ⅱ、Ⅲ群に入っていた。外来患者ではⅠ、Ⅱ群9名中5名が毎日入浴するのに対して、Ⅲ群では8名中7名が1日毎の入浴であった。男女間や洗い方による差異はなかった。シャント閉塞や外傷に対する注意はしているが、感染に対して注意していると答えた例は27%と少なかった。

〈考察〉シャント部の清潔については生活の活動性や入浴回数が影響しており、患者の生活にあわせた指導が必要である。



## Ⅱ．特別講演 透析療法における人間工学的検討

大野記念病院副院長 田中 寛

**目 的：**透析療法における業務は患者の病態の変化に素早く対応しなければならないが、その一方で単純な業務を同じ患者を対象として繰り返し行うという特殊性がある。そこで、医師の立場でなく透析業務の管理者という視点から、さらなる労働を強いるのではなく、より充実した質の高い透析医療の環境作りを目的として、当院の透析室における看護婦、ならびに臨床工学技士の業務を人間工学的に分析した。

**対象および方法：**当腎臓病センターAブロック（透析用ベッド30床）とその担当である13名の看護婦ならびに5名の臨床工学技士を対象としてビデオカメラおよびホルター心電計を用いて対象の稼働負荷状況を録画・記録し、その行動内容、時間、その推移、身体的負荷の程度などを把握し、ストリング・ダイヤグラムによる行動パターン分析および稼働距離の計測などを行った。

**結 果：**日勤における稼働分析では作業72.8%（透析40.4%、付随作業22.8%、付帯作業9.6%）、余裕23.2%、非作業4.0%であり、準夜勤では作業63.7%（透析45.4%、付随作業8.8%、付帯作業9.5%）、余裕24.0%、非作業12.3%であった。両勤務帯とも看護婦が患者に直接接してなされる看護作業（直接看護作業：看護スタッフが他の作業に追われずに患者に接することができ得る作業すべて）が非常に少なかった。

臨床工学技士の作業時間比率は85.9%であり、そのうち透析室内作業は48.4%、透析液調整作業は23.1%であった。

**考察および結論：**透析患者への直接サービスとなる看護や患者指導といった直接看護比率が人間工学的検討により向上すれば、充実した質の高い透析医療に一步近づくものと考ええる。また、透析液調整作業は臨床工学技士の一日の稼働時間の多くを占めており、今回はドライケミカル型透析液使用時の稼働分析についても言及する予定である。